オリンピックスポーツ文化研究
2020. 6　No. 5　1 ― 9

特別寄稿

スポーツと平和
―オリンピックは平和の使者たりえたか―

谷　釜　了　正（日本体育大学名誉教授）

本稿は 2017 年 3 月 21 日に行われた第 3 回マンスリー学術セミナー（主催日本体育大学総合スポーツ科学研究センター FD 委員会）での講演が基となっている.

日本体育大学の教員等による体育スポーツに関する総合的研究を統括・推進するために，2014 年 4 月に＜総合スポーツ科学研究センター＞が設置されました．その初代センター長に就任された中里浩一教授から，このセンターが主催する＜第 3 回マンスリー学術セミナー＞にお招き頂きましたこと，とても光栄です．私が学長に就任して研究組織の一本化（有機化）を図るために伝統ある＜体育研究所＞と＜トレーニングセンター＞との＜協同＞研究が可能になるような＜機構＞を立ち上げることを構想・計画しましたが，その考えの是非に関して＜体育研究所＞の所長をお願いしていた中里教授と，本学大学院体育科学研究科の研究科長に就いておられた高橋健夫教授と，科学的トレーニングの奨励・促進を担ってもらっていたトレーニングセンター長の西山哲成教授の三名に私的に相談（諮問）いたしました．その結果，＜機構＞として総合スポーツ科学センターを設置すべしとのご意見（答申）を頂きました．この答申に沿って，体育スポーツの基礎研究と応用研究が有機的に連関することを狙った＜教育と研究＞の組織が立ち上げられています．そんなわけで，本学の未来を切り開くことが期待される，新しい＜教育と研究＞の奨励促進組織の長として，中里浩一教授に就任を依頼した次第です．＜高負担＞となることは明らかでしたが，無理を押して，引き受けて頂きました.

本学の将来を担う＜教育と研究のための理論と実践に関する理念＞がこの機構の誕生によって可視化したと思っております．その成果は NASS（Nittaidai Athlete Support System）を組織してアスリートに対する医科学サポートとタレント発掘を行ってきたことにみることができると思っています. 今回, 本学を代表する研究者たるセンター長から講演の依頼がありましたので，お断りする理由を探すことが難しいことから，謹んでお引き受けした次第です．同時にスポーツ人類学者であり，現在，大学院体育科学研究科長の石井隆憲教授による企みも見え隠れすることも受諾の理由です．むろん，FD 委員会共催というのもお断りできない理由でした.

本日はお手元に二種類の資料（レジュメ）を用意しております．一つは講演の梗概を記したものであり，他の一つは補遺としてかつて母校の高校生に向けて講演したときの概要（タイトルは同名）です．時間的に制約がありますので，全てを取り上げることができません．とくに補遺資料の方については，後ほど皆さん個々人において，ザット，目を通して頂きたいと思います.

講演の内容ですが，最初にこのテーマを選んだ理由（＝＜戦争にまみれた国際社会の実相と平和への希求＞）を取り上げます．次いで＜近代ヨーロッパ人が学んだ古典古代（ギリシャ・ローマ）の祭典競技とは何であったのか＞を眺め，さらに＜どうして近代人は古代の＜戦争回避の思想＞を学ぶ必要があったのか」について考えてみます．そして最後に，＜世界「平和」の実現に果たすオ

リンピックの役割＞について私の思うところを語りたいと思います.

1．戦争にまみれた国際社会の実相と「平和」への希求

私たちは「オリンピック・ムーブメント(Olympic Movement)」という言葉をよく耳にしますが，それと同時に「崇高なオリンピックの理念」に接します．本日の講演において，私は，＜オリンピック・ムーブメント＞の核心を＜平和教育運動＞と解し，＜オリンピックとは平和教育運動の推進を確認するための文化的装置のひとつ＞であるとの見地に立脚して，オリンピック競技大会が人類の＜平等＞にして＜平和＞な世界の実現に果たす役割について考えることにいたします.

ヨーロッパ近代とはヨーロッパの世界化ないしは世界のヨーロッパ化が促進されたことによって戦争を不可避とした時代です．ヨーロッパを戦場にした第一次世界大戦，さらには世界中を戦場にした第二次世界大戦の勃発を想起して下さい．また，日本の近代は明治維新を以ってはじまりますが，戊辰戦争，西南戦争，日清戦争，日露戦争，日中戦争，太平洋戦争など，ほぼ十年周期に戦争にまみれていますが，これは近代日本が戦争を前提（不可避）として＜近代国家＞建設を進めた時代であることを示しています．敗戦後，日本は71年もの間，戦争のない平和な時代を醸しています．余談になりますが, この平和が継続した「戦後」という時代は平安時代（凡そ400年），江戸時代（凡そ270年）に続くものです．しかし，世界中で今なお戦争・紛争は跡を経ちません．イラク戦争，アフガニスタン戦争，9.11テロ（ニューヨーク世界貿易センタービルへの旅客機の突入），パレスチナ・イスラエル紛争，民族紛争（ユーゴスラビア，東チモール，ミャンマー），クルド民族とトルコとの紛争，ISの狼藉（アラブの春とアラブ世界の崩壊），クリミア半島帰属紛争などです．それらの戦争・紛争に伴って発生した難民問題は深刻です. こうしたことから, ＜オリンピックによる戦争回避の思想＞は世界中の為政者たちに浸透することはなかったと断ずることができそうです.

ここでお話しようとする講演の副題＜オリンピックは平和の使者たりえたのか＞に対する結論めいたことを申し上げますと，その答えは＜ノー＞であるといわねばなりません．今日の国際社会は平和とはいえず，戦争にまみれ，民族と民族とのアイデンティティが相容れないために勃発した紛争はメディアによって日常的に報道されていることから知ることができます．冷戦時代が終焉し，東西両陣営の対立がなくなったといいながらも，現実的には冷戦時代さながらの国際政治の力学が働いています．たとえば，シリアの内戦ですが，アサド大統領の背後にロシアがいて，アンチアサド勢力の背後にアメリカがいることが伝えられています．そんな戦争や紛争の渦中に平和を希求してやまないスポーツマンがいなかったわけでもなく，オリンピアンも大勢いたはずなのに，＜休戦＞どころか＜内戦＞が深刻さを増すばかりです.

1994年に開催のリレハンメル冬季オリンピック（フィンランド）の折にサマランチIOC会長は紛争中の旧ユーゴスラビアの首都・サラエボを緊急訪問し，＜オリンピックの休戦＞を世界に向かってアピールしました．これを機に，IOCは当該オリンピック開催の前年（1993）に国連と連携して国連総会において＜スポーツとオリンピックの理想のための国際年＞と題する議決を採択するようになりますが，その後，オリンピック競技大会の前年に国連は＜オリンピックの休戦＞の決議を採択してきました．また，国連及びユネスコがオリンピックの平和活動に対する期待の表明(2015年1月，国連とユネスコが＜持続可能な開発と世界平和などスポーツが社会の問題解決に貢献できる＞と表明）をしているのも，注目しておきたいと思います.

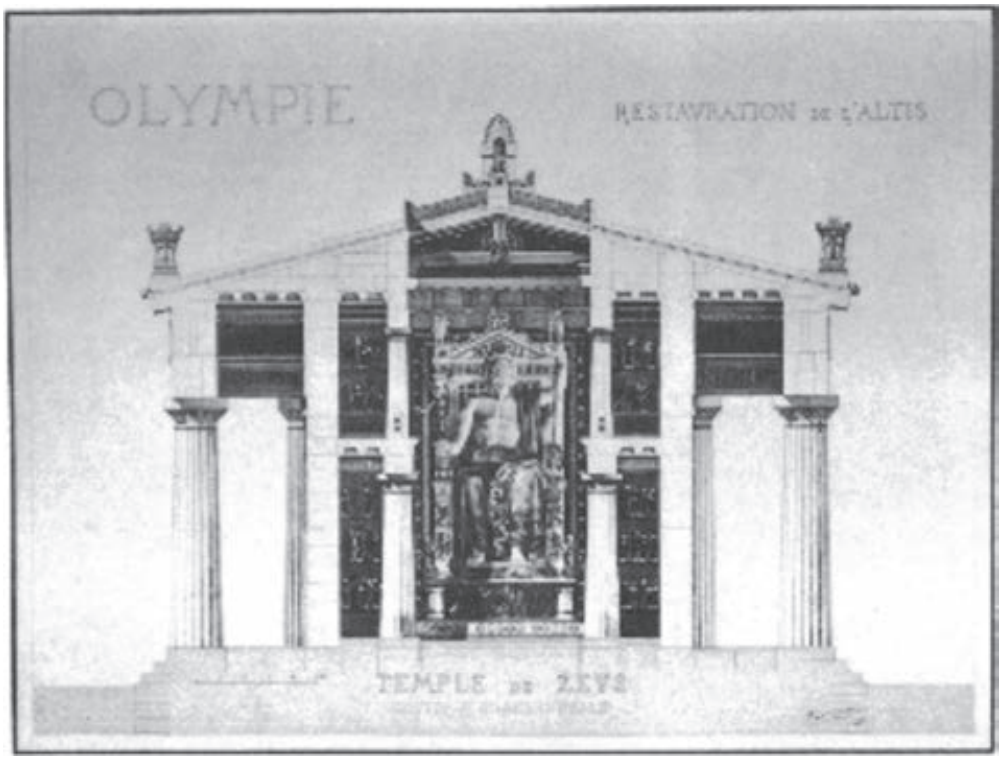
現在，地球規模の世界的戦争はいくらなんでも

回避されるだろうといわれていますが，小・中規模の戦争は終結することを知りません．残念ながら，こうした世界情勢はオリンピックの＜戦争回避の思想＞が色あせることなく必要とされていることを意味しています．それではこの崇高なる思想はどのような歴史的背景をもって，近・現代人に受け容れられてきたのでしょうか．その理由は近代ヨーロッパ人が学んだとされる古代ギリシャ・ローマの祭典競技にあるといわれておりますので，その祭典競技に絞って眺め返してみたいと思います．

２．近代のヨーロッパ人が学んだ古典古代（古代のギリシャ・ローマ）の祭典競技とは

果たして，近代オリンピックは古代オリンピックの＜復活＞なのでしょうか？この疑問について，私は，古代ギリシャの＜オリンピア＞の地で実施されていた＜祭典競技＞の近代人による＜解釈＞であり，＜復活＞ではない，と理解しています．ヨーロッパ古代において開催された全（汎）民族的祭典として知られている＜四大祭典競技（ネメア・ピュティア・イストミア・オリンピア）＞や＜デルポイ（デルフイ）の祭典競技＞は有名ですが，その中でもオリンピア祭典競技は古代の史家ヘロドトスが彼の著作『歴史』の中で記述していたことや，近代ドイツの考古学者エルンスト・ク（カ）ルチウスがオリンピア遺跡を発掘したことを通して知れ渡るようになりました．

ここで皆さんに＜ゼウス神＞をイメージして頂きます．＜オリンピアの主神，ゼウスの像と神殿＞の写真を観て下さい．とても荘厳です．このイメージ図は日体大図書館に所蔵の書籍資料（フランスから出版）からの転写ですが，とても大きな図です．私には写真を撮る技術がないので，床にその図をおいて椅子に乗って覆いかぶさるように真上から撮影したものです．司書の資格を有し，いまは総合スポーツ科学センターで教育と研究の支援をされている中島さんから，“ちょっと薄いですね”とやんわり批判された代物ですが，それはカ



（日本体育大学図書館「オリンピア主神，ゼウスの像と神殿」『特別図書目録』日本体育大学図書館，1987 年，p.69）

メラが悪いのです．私の撮影技術のせいではありません．ですから，皆さんには図書館で本物を確認して欲しいと思います．古代ギリシャ人にとってゼウス神は心から崇敬すべき存在であったことが伝わってきます．

さて，古代ギリシャの市民が夢中になったオリンピア祭典競技は＜ゼウス神＞を守護神として開催されていましたが，その起源は定かではありません．一説ではペロプスがオイノマオスとの競車（戦車競走）に勝ったことを記念して始めたといわれています．この祭典競技は，ギリシャの暦年（４年を１サイクル）にそってオリンピアの地で開催されるようになったイベントですが，紀元前７６６年にはじまり，紀元393年にローマのテオドシウスⅠ世(キリスト教を国教と定める)によって禁止されるまで，1000年以上も続いています．

この＜古代オリンピック＞は，＜近代オリンピック＞の思想とは異なり，「宗教」を排除するものではありませんでした．ゼウス神に生贄（いけにえ）と競技を奉納する宗教的行事として実施されました．ギリシャ人でありたいのなら，誰もが，ゼウス神を信仰しなければなりませんでした．したがって，ゼウス神への信仰の証を表明する行為の一つとして競技者や見物者が祭典に関わるのを＜支援＞しなければならなかったのです．これに対して＜妨害＞する者は，ギリシャ人であることを放棄する覚悟が必要でした．

ポリス（都市国家）間で＜戦争＞の最中であっても，当事者たるポリスは＜休戦＞してオリンピア祭典競技に選手を派遣しなければならなかったのです．祭典競技に詣でる人々に危害を加えることはまた，ゼウス神に対する冒涜であると解されました．戦争を中断してゼウス神に忠誠を尽くすのが，ギリシャ人であることを証すための方便でもありました．したがってオリンピア祭典競技はギリシャ人としてのアイデンティティを確認するための文化的装置として機能したといわねばなりません．

この仕掛け，すなわち祭典競技期間中の停戦（休戦），を古代のギリシャ人たちは＜エケケイリア＞と呼びました．現代日本では＜オリンピックの休戦＞ないしは＜聖なる休戦＞と邦訳されています．近代人は古代の運動競技に学んだのではなく，＜戦争回避の思想＞を古代社会の宗教的政治的思想から学んだといえます．

３．どうして近代人は古代の＜戦争回避の思想＞を学ぶ必要があったのか

それを説く鍵は＜近代＞という時代認識にあるといえます．近代という時代は，ヨーロッパが植民地主義をもって世界を席巻した＜戦争の世紀（19・20世紀）＞であり，戦争を不可避とする時代でした．それだけに，近代のヨーロッパ人は誰もが＜平和＞を強く希求したのです．ここに＜スポーツによる戦争回避の思想＞の受容をみてとることができます．

＜オリンピック＞の提唱はフランスのピエール・ド・クーベルタン男爵によりますが，彼が＜平和活動の手段＞として選択したスポーツは近代のイギリスで発達した競技スポーツ（歴史的には＜近代スポーツ＞）をさします．古代のオリンピック競技種目がそっくりそのまま近代のオリンピック競技種目として取り込まれたわけではありません．

＜近代スポーツ＞は次に掲げる産業化（数量的合理化），組織化，倫理化，国際化などの特徴を有しています．そこでこれらの諸特徴をひとつずつ取り上げて近代スポーツが誕生した歴史的背景について考えてみたいと思います．

【産業化（数量的合理化による）】

近代スポーツは数量的合理主義に適った運動競技ですが，その競技の形態は＜時間を競争する＞＜距離を競争する＞＜得点を競争する＞の三つに整理することができます．このような競争形態を可能にしたのは，世界共通の時計と物差しの発明と普及でありますが，それを可能にしたのは近代

科学技術の発達でした．無論，これだけではありません．近代スポーツの進展を後押ししたのは，鉄とゴムの精錬加工技術の発達によるスポーツ用器具の開発とその軽量化であり，建築工学技術の発達による大型の運動施設の建設であり，移動手段の発達（ワットの内燃機関の発明→鉄道の敷設技術・蒸気船の建造技術の発達による国際交流の進展）です．

このような観方をさらに具体的に見てみたいと思います．競技形態の側面に絞ってみてみると，近代スポーツ，つまり競技スポーツ（運動競技）は時間を刻む優れた精密な機械（＝時計）が開発されることがなければ成り立たないことが分かります．また，精緻なメジャーの製造技術がなければ，世界新記録を云々することもできません．さらに，スポーツ用器具の観点からみて，鉄やゴムの精錬加工技術の発達は近代スポーツの進展にとって不可欠であるといえます．丈夫で軽量の鉄製品としてのスポーツ用器具や，ゴムを使った製造技術の発達によるゴムボールなどは競技スポーツの進展を促しました．たとえば，ダンロップ社の社長が孫娘のために快適な自転車を製造するにあたって，軽量な自転車のフレームに，快適な走行をはかる空気入りタイヤを装着し，遊具としての近代的自転車を開発します．さらに，その空気入りタイヤの開発の過程で誕生した＜チューブ＞は，その後，各種の精緻なボールの製造を促しました．また，建築技術の発達は大規模なスタジアムや体育館を建設し，＜みるスポーツ＞の進展を促しています．さらにまた，移動手段の発達，たとえばワットの内燃機関の開発が蒸気機関車（汽車）や蒸気船（汽船）を産みだし，人やモノの大量輸送を可能にしました．これによって国内の競技会や，国際的な競技会を開催する環境ができあがったのです．

【組織化】

ヨーロッパ近代は戦争の世紀を醸した時代ですが，ヨーロッパ諸国による植民地争奪戦としての国家間戦争が不可避であったことから，近代人としての人材の育成も大きく変化します．知的教育偏重から身体教育（＝体育）重視へと変化したのですが，戦争への従軍や近代産業への就労に応えることのできる強壮・強靭な身体を育成するための教育が学校現場で行われるようになります．国家が国家衛生（公衆衛生）の一環として体育の振興を図り，国民の体位・体力の向上に資することを政策として推進したのはその一例です．イギリスでは身体修練の手段としてスポーツを採用し，パブリックスクールでは青少年にスポーツ教材を計画的に課すようになりました．粗暴なスポーツは学校教育というフィルターをかけることによって安全な運動文化に改良されたためです．これによってスポーツは評判をとり，やがてスポーツのルールの統一とそれを管理する組織の結成が推進されるようになります．例えば，スポーツの母国・イギリスでは，中等学校のひとつ＜ラグビー校＞の校長（T. アーノルド）がフットボールを校技として奨励しましたが，それが結果として＜ラグビー校式のフットボール＞をイギリス全土へと普及させることとなりました．全国から生徒（貴族や有産市民階級の子弟）が入学してくるこの学校では，生徒たちの出身地がそれぞれ異なることからフットボールのルールも異なっていました．そのため，エリス少年がボールをもって駆けても不思議ではなく，先ずは校内ルールの制定が必要になりました．これを目撃した校長が，その少年の行動を軸にしてラグビー校式のフットボールのルールを定めた，と思われます．ここに＜ラグビー校式フットボール＞（ラガー）の誕生をみることができます．そして卒業生たちはその新ルールを出身地に持ち帰り普及に努めますが，これによって次第に全国大会を開催する環境が整ってまいります．試合をするための，試合に関する運用と競技ルールを統一管理するための組織が結成され，やがて全国組織の誕生をみるにいたります．ともあれ，学校間の対校戦がスポーツの組織化に大きく寄与したことは注目されます．

【倫理化】

イギリスの前近代（近世）と近代を担った階層として知られるジェントリー階層は近代学校として改革された学校に子弟を入学させました．このことによってジェントリー階層の倫理（精神）は＜ジェントルマンシップ＞として近代のリーダーたちに継承されます．近代スポーツ誕生の当初は貴族･ジェントリー階層や有産市民階層（ブルジョアジー）がスポーツを担っていたこととは無関係ではなさそうです．貴族・ジェントリー階層や有産市民階層の子弟が中等・高等教育機関に進学して近代スポーツを担っていたからです．いうまでもなく, スポーツによって賞金を稼ぐ必要はなく, スポーツのプロ化現象はみられません．したがって，ジェントルマンスポーツはアマチュアスポーツと理解され，＜ジェントルマンシップ＞はそのまま＜スポーツマンシップ＞として受け容れられていきます．（近代日本におけるスポーツの受容に当たって，前近代の担い手である武士が生きる理念とした武士道精神は＜礼に始まって礼に終る＞と表現され，これが近代スポーツの倫理として持ち込まれているのと類似していることに，注目したいと思います.）

オリンピックの提唱者でありフランスの教育者でもの中にあったピエール・ド・クーベルタン男爵はイギリスに留学した折りにラグビー校を訪問し，T. アーノルド校長のスポーツ教育の理念に感動し，フランスの青少年教育のためにスポーツ教育を導入しようと努めます．さらに，クーベルタン男爵は欧米諸国における青少年育成の手段としてイギリスで誕生した近代スポーツに注目するようになります．戦争を不可避とする近代という時代に，古代ギリシャで大切にされていた＜戦争回避の思想＞を継承することを思い立ち，その思想を国際社会の中に浸透させるために，国際的なスポーツ競技大会の開催を提唱したように思います．その結果，人種，宗教，政治に関する諸問題を，一部分，棚上げにして，国際スポーツ競技大会を開催することに成功しました．それでは世界平和の実現を目指すオリンピックはその役割をどこまで果たすことができたのでしょうか．この件について，この後，考えてみたいと思います．

【国際化】

この国際化については次に触れますので，重複を避けるために，省略いたします．

４．世界「平和」の実現に果たすオリンピックの役割

18 世紀後半の欧米で進展した産業（工業）国家としての近代国家建設のうねりは世界をまるごと包み込んでいきます．非ヨーロッパ世界の国々は欧米諸国による植民地化を免れるために，こぞって，自らをヨーロッパ化しようとしたことによります．近代国家化する以前のヨーロッパにおいて人びとが楽しんでいた娯楽や伝統スポーツは地域特有のものであり，民族固有のものでもありましたが, やがて都市の文化として再編（一本化）されていきます．スポーツのルールは＜安全性＞を軸にして規定され，全国的な規模で通用するものとして統一されるわけですが，これを管理する組織は全国各地で結成されるようになり，近代ヨーロッパ国家の世界史の進展とともに，国家の支援を得て＜国際スポーツ＞文化を育む組織へと昇華してまいります. そのため, 在来の伝統スポーツや未組織の民族スポーツは因循姑息なものとして国際スポーツの周縁へと追いやられることになってしまいました.

これに対して，オリンピックに代表されるように，国際スポーツは異民族間の交流の場を提供することから，＜国際社会の平和＞のシンボルとみなされるようになりました．しかし，このイギリス古来のスポーツを通してイギリス以外の異民族の心情や文化を知ることは容易ではありません．むしろその機能を民族スポーツに求めるようになってまいります．＜差異（ちがい）を認める世界の発見＞，これは私が僧侶として好んで使って

きた標語（真宗大谷派による蓮如上人生誕500回忌御遠忌要スローガン）ですが，民族スポーツを照射し，このスポーツに異文化理解（異文化コミュニケーション）の役割を期待するようになったといってもいいのではないかと思います．要するに，＜多様性＞を受け容れようではないかというわけです．スポーツのみに世界平和の実現という大きな課題を負わせるわけにはいきませんが，幻想でしかないかどうかは別にして，オリンピックを＜平和の使者＞にしようとする運動は，いまなお，健在です．

しかし，そのオリンピックは国民国家をベースにした競技会である限りにおいて，論理的には国民国家間の戦争を回避する目的をもって，平和な国際社会を築くことしか，期待できないことになります．けれども，国民国家は，互いに相手国を理解しようとするためには，その国を構成している国民の民族意識を細部に亘って理解しておく必要がでてきます．そのためには，宗教や歴史や言語や神話などを共有する，民族の意識やアイデンティティを把握しておかねばなりません．そういった手助けをしてくれるのは，石井隆憲先生のスポーツ人類学であったり，スポーツ文化人類学，スポーツ社会人類学であったりするわけですが，こういった分野の力を借りなければ，近代スポーツ，現代スポーツ及び科学技術に裏打ちされたスポーツが多くの人たちに仲睦まじく競うことのできる場を提供することは＜無理＞である，と申し上げたいと思います．

だから私は宗教・人種・政治などを棚上げしてオリンピックの平和教育運動を推進するのは無理であると考えております．ゼウス神への信仰に基づくオリンピック祭典競技はローマ時代になって，テオドシウス帝のキリスト教の国教化によって異教信仰の象徴として廃止され，関連諸施設が破壊されたことに注目してみたらどうでしょう．ヨーロッパ近代の人びとによって提唱されたオリンピック祭典競技は近代のキリスト教徒によって＜復活＞させられたことや，第4回オリンピックのロンドン大会時にアメリカの選手とイギリスの選手が衝突したことを知った＜セントポール大聖堂＞の主教ペンシルベニアがミサに訪れた双方の選手たちに＜勝つことでなく参加することにこそ意義がある＞と諭したこと，初期のオリンピックは日曜日を＜安息日＞として競技を行わなかったこと，などから，極めて宗教的であったといわねばなりません．これに対してヨーロッパの世界進出によってヨーロッパやアメリカの国々はキリスト教以外の異教徒と邂逅することになり，異宗教との和解が必要になったといえます．この段階で，実質的に宗教の棚上げがなされたと思われます．こうした事実から，多くは語りませんが，宗教も人種も民族も政治も棚上げするのではなく，これらとしっかり向き合うことこそが，オリンピック奨励促進運動を未来に継承せしめることになると考えています．＜政治的たれ！＞と申し上げたいと思います．

5．オリンピックは平和の使者たりえたか ―オリンピック・ムーブメントを生きる―

東京都とJOCが2020年のオリンピックの招致活動を展開する中で，日体大はスポーツによる国際的な平和活動を行ってきました．2012年と2013年と2015年の3回に亘って，朝鮮民主主義人民共和国の首都・平壌を訪れ，朝鮮体育大学との連携協定の締結とスポーツ交流を行いました．松浪健四郎日本体育大学理事長が団長，学長たる私が副団長となって，男女学生を引率して，遠征してまいりました．＜オリンピックを招致する国が隣国との交流をしようとしないのでは，招致の資格を欠く＞とする，理事長の発想（信念）に基づいての行動でした．平壌では大歓迎を受け，＜金日成スタジアム（4万人収容）＞の観客席を埋め尽くし，友好的な交流が実現しています．

本日のこの講演に出席されている皆さんの中，4分の3くらいの方々が“なんで，あんな国と交流するのか？”との思いを抱いておられると思い

ます．しかし，スポーツマンである私たちは，スポーツをこよなく愛し，スポーツを通して国際社会の平和・友好・親善を図ろうという気持ちを持つことが大切であると申し上げたい．国交の扉が開いていない国に赴いてその扉を開くことに躊躇してはなりません．たしかに気持ちの上では腰が引けることは否定できませんが，＜平和の使者＞になろうとの思いは私をして朝鮮国へのスポーツ遠征に踏み切らしめることとなりました．朝鮮国の体育スポーツ関係者と友好的な人間関係を結んでおけば，何かが起こったとき，何らかの形で争い事を起こさないための糸口を見出すことができるかもしれません．余談になりますが，そういった思いがなくて，なんでオリンピックやスポーツを介して＜世界平和＞を高らかに語ることができましょうか．皆さん，そうは思いませんか．

現在，日体大は松浪健四郎理事長のリーダーシップのもとで，JICA（青年海外協力隊）と連携協定を締結しています．これが，青年海外協力隊員をスポーツに関連する教育機関で養成することを目的とした＜スポーツ文化学部＞の設置に結びついています．体育スポーツの先進国である日本の若者たちがすすんで開発途上国へ赴き，スポーツ教育の可能性を拓いていく必要があると考えたからです．JICA という外務省の外郭団体を通して派遣されれば，国家の期待を背に異文化に触れ，異文化を知り，異文化間交流の必要性を痛感することになるに違いありません．日本人の心情を満載した＜武道＞や＜伝統芸能＞が含み持つ威儀を発信すれば，国際社会において異文化間コミュニケーションを円滑にはかることができるからです．

国際社会はいまだに戦争・紛争は絶えず，その仲介役をオリンピックが担う必要性はますます高まっております．ことばのまったき意味で，いまだにオリンピックは国際社会における＜平和の使者＞になることができておりませんが，しかしその役割が期待されなくなったわけではありません．その使命を果たすための運動（オリンピックムーブメント）が引き続き展開されねばなりません．平和な国際社会が実現した時に初めて，その役割を終えることができます．オリンピックを必要としない国際社会が顕現することを願うのみです．

最後に，＜オリンピックは平和の使者たりえたか？＞について私の考えるところを語りたいと思います．結論的にいえば，オリンピックは＜平和の使者＞になり得なかった，といえます．世界中で，未だに，戦争も紛争も根絶していないからです．だからといって，オリンピックは現代の国際社会において必要ではない，ということもできません．世界中の至る所で戦争や紛争が起こっているためです．スポーツを通して＜平等＞にして＜平和＞な国際社会が実現することを目指して，スポーツマンは活動しなければなりません．＜世界一を決定する総合運動会＞としてのオリンピック競技大会の役割を期待すること以上に，＜オリンピック＞を＜平和教育運動＞を顕現させる文化的装置として期待をかけることが大切です．

＜勝った負けた（勝敗）＞を競うだけなら種目別の世界選手権やワールドカップを開催して真の世界一を決めればいい．しかし，オリンピック競技大会は世界の若者たちが一堂に会して友好親善を図る絶好の機会を提供してくれる文化的装置とみなし，＜オリンピック憲章＞で規定されている＜選手村＞を＜国境を越えて濃厚な友好親善を図るための装置＞として機能させることの方が大切であるといわねばなりません．オリンピック競技大会の開催は＜平等＞＜平和＞の問題だけでなく，いまや人類の課題となっている＜地球環境＞の問題を語り合う機会ともなるのです．小池百合子都知事がボート競技の会場を東北の仙台に移したいと提案しましたが，＜選手村＞の設置義務を目的とする理念を削ぐ行為に他ならないと申し上げねばなりません．ともあれ，人種・宗教・政治を棚上げするのではなく，それをまるごと抱え込むことを目的として，オリンピックの役割を再考する時機にきていることは確かなようです．

私は定年退職を機に僧侶として自坊で静かな生活を送るつもりですが，この４月から『仏説無量壽経』という経典を拝読・読経する日常がはじまります．その経典の下巻に＜天下和順＞＜兵戈無用＞の文言が記されておりますので，みなさんにご披露したいと思います．世界中（天下世間）が＜平和＞であるならば，戦争のための兵も武器も必要ない，という意味です．この文言に従えば，世界中が平和なら，兵も武器も必要でなくなくなり，平和を希求するオリンピックも無用である，といえるように思います．言い過ぎですかね，皆さん！

予定の時間をオーバーしてしまいました．お許し下さい．これをもって私の講演を終了とさせて頂きます．ご清聴，有り難うございました．

（付記：講演内容を文字に起こすにあたっては，本学の尾川翔大氏の協力を得た．記して感謝申し上げたい．）